

牧阿佐美バレエ団 『白鳥の湖』第2幕 "Swan Lake" Act 2.

原振付=マリウス・プティパ、レフ・イワノフ
演出・改訂振付=三谷恭三
(テリー・ウェストモアランド版に基づく)
美術=ボブ・リングウッド
音楽=チャイコフスキー

Program Note

不朽の名作として知られる『白鳥の湖』は、1877年にモスクワ・ボリショイ劇場で初演。1895年にプティパとイワノフが新たに振付を行い、マリンスキー劇場で大成功を収める。その後ソビエト時代に結末が変更されハッピーエンド版が作られたほか、世界中の振付家が改訂に挑み、現在では「バレエ団の数だけ『白鳥の湖』がある」と言われるほど沢山の版が存在する。牧阿佐美バレエ団の誇る『白鳥の湖』は、1980年英国ロイヤル・バレエの名教師テリー・ウェストモアランドによって伝えられた、プティパ/イワノフの原振付を忠実に受け継ぐ悲劇の『白鳥の湖』である。

全4幕構成のうち、今回上演されるのは、第2幕、悪魔が支配する湖のほとり。大勢の美しい白鳥たちが織りなす純白の世界だ。白鳥狩りに来た王子の目の前に現れたのは、悪魔の呪いによって白鳥の姿に変えられた美しいオデット姫。そっと近づく王子にオデットは悲しい身の上を打ち明ける。二人の出会いのシーンは、この版一番の見どころでもある。現在、多く

の版において、会話を伝えるマイムが省略されてしまっている中、牧阿佐美バレエ団の『白鳥の湖』は、オリジナルのままに一言一言を丁寧にマイムで語ってゆく。そしてもちろん、バレエ団が誇る一糸乱れぬコール・ド・バレエにも注目だ。舞台を埋め尽くす群舞は限りなく美しいフォーメーションを描いてゆく。

美術を手掛けたのは、数々のオペラやハリウッド映画でも活躍する世界的なデザイナー、ボブ・リングウッド。柔らかな月光に包まれる舞台面と、そこに浮かび上がる純白の衣裳の調和は、バレエ・ブラン(=白いバレエ)と謳われるこの幕の魅力を一層際立たせ、我々を幻想の世界へと誘ってくれる。

この度主役を務めるのは、大抜擢となる期待の新人二人。この舞台が初主演となる秦悠里愛と一昨年『くるみ割り人形』で全幕主役デビューを果たしたばかりの小池京介。二人とも確かな技術はもちろんのこと、美しい容姿と情感あふれる優雅さが魅力だ。初演以来、バレエ団で大切に踊り継がれてきたこの作品に、新たな息吹を感じさせてくれるだろう。

川島京子(跡見学園女子大学教授)



© 鹿摩隆司

Choreographer



三谷恭三 Kyozo Mitani

谷桃子バレエ団研究所で本格的にクラシック・バレエを始め、1974年『ジゼル』で谷桃子のパートナーとしてアルブレヒトを踊り大きな注目を集める。71年全国舞踊コンクール第1位文部大臣賞奨励賞、76年ヴァルナ国際バレエコンクールで牧阿佐美バレエ団の清水洋子とともに最優秀カップル賞を受賞。同年、文化庁芸術家在外研修員としてモナコ留学、マリカ・ベゾブラソバに師事。79年牧阿佐美バレエ団に入団し数多くの主役を踊る。94年芸術監督に就任。振付家として創作を発表するほか、『くるみ割り人形』『白鳥の湖』等の古典全幕の演出・改訂振付を手掛ける。86年芸術選奨文部大臣新人賞、96年橋秋子賞特別賞、99年ニムラ舞踊賞。

Ballet Company

牧阿佐美バレエ団 Asami Maki Ballet Tokyo

日本バレエ界草分けの一人、橋秋子が1933年に創設した橋秋子バレエ研究所及びバレエ団を母体として1956年に設立。チャイコフスキーの三大バレエ、『ドン・キホーテ』『ライモンダ』等、質の高い衣裳・舞台装置による豪華な古典全幕、文学作品をバレエ化した『ロメオとジュリエット』『三銃士』、近現代の名作、ジョージ・バランシン振付『セレナーデ』、サー・フレデリック・アシュトン振付『ラ・フィエ・マル・ガルデ』、ローラン・プティ振付『ノートルダム・ド・パリ』『アルルの女』『若者と死』『デューク・エリントン・バレエ』、映像演出を大胆に取り入れた『飛鳥 ASUKA』等の創作まで幅広いレパートリーを持つ。関連の教育機関(橋バレエ学校、AM スチューデント、日本ジュニアバレエ、牧阿佐美バレエ塾)の一貫した教育システムにより、国内外で活躍する数多くのダンサーを輩出。2014年から文京区と事業提携し、バレエ講座の開催等を通して普及活動に取り組む。



© 鹿摩隆司

Dancer



オデット 秦悠里愛 Yuria Hata

池袋コミュニティ・カレッジ(牧阿佐美チャイルドジュニアバレエ)、阿部友喜バレエスタジオ、日本ジュニアバレエ、A.M.スチューデント、牧阿佐美バレエ塾(盛田正明スカラシップ第3期生)でバレエを学ぶ。2024年牧阿佐美バレエ団に入団。新国立劇場バレエ団公演『ラ・バヤデル』壺の踊り、『くるみ割り人形』クララ、牧阿佐美バレエ団公演『くるみ割り人形』クララ、棒キャンディー、雪の精、花のワルツなどを踊るほか、『白鳥の湖』『時の彼方に アピアント』に出演している。



ジークフリート王子 小池京介 Kyoike Kiyosuke

渡辺珠実バレエ研究所、A.M.スチューデント、日本ジュニアバレエ、橋バレエ学校で学ぶ。2020年、牧阿佐美バレエ団に入団。2021年~23年、盛田正明スカラシップを受けて牧阿佐美バレエ塾で学んだ。2023年『くるみ割り人形』で主役デビュー。『白鳥の湖』のバ・ド・トロワ、『ダイアナとアクティオン』のアクティオン、『ドン・キホーテ』マタドール、『眠れる森の美女』狼、『ル・コンバ』十字軍の騎士などを踊るほか、サー・フレデリック・アシュトン振付『誕生日の贈り物』、ローラン・プティ振付『アルルの女』に出演している。



フォン・ロットバルト 米倉大陽 Tomoharu Yonekura

ロシア国立モスクワバレエアカデミー(ボリショイバレエ学校)で学び、ニコライ・レオニドビッチ・ダクキンに師事。2008年同校を卒業後、ロシア国立バレエ・モスクワとモスクワ・シティ・バレエで踊った。2015年牧阿佐美バレエ団に入団。『ロメオとジュリエット』のティボルト、『白鳥の湖』のフォン・ロットバルト、バ・ド・トロワ、スペインの踊り、ウィリアム・ダラー振付『ル・コンバ』の十字軍の騎士などを踊るほか、『くるみ割り人形』『眠れる森の美女』『ドン・キホーテ』、ローラン・プティ振付『アルルの女』に出演している。

王子の友人たち：中島哲也、坂爪智栄、石田亮一、近藤悠歩、正木龍之介、石山 陸

小さい4羽の白鳥：米澤真弓、阿部千尋、上中穂香、山本翔子

大きい4羽の白鳥：茂田絵美子、久保茉莉恵、三宅里奈、田切眞純美

白鳥たち：西山珠里、高橋万由梨、今村のぞみ、田辺 彩、渡部由綺子、白濱春可、鵜渕ののか、鈴木佑菜、小島愛梨、大道りさ、伊東真梨乃、

土川世莉奈、大崎結華、菊地春花、遠藤 櫻、深井 絹、小川莉音、佐藤利香

前田紗江 & 中尾太亮

『ラ・シルフィード』第2幕からパ・ド・ドウ

"La Sylphide" Act 2 pas de deux

振付=オーギュスト・ブルノンヴィル
音楽=レーヴェンスヨルド

Program Note

19世紀の前半、バレエには新しい改革の波が訪れていた。舞台は異国や遠い過去の世界など、今、ここ、ではないどこか。描かれるのは、若者がこの世ならぬ美女に恋をし破滅する物語。この世ならぬ美女とはすなわち妖精であり、若者がその身をかき抱こうとしても、腕からすりりと抜け出してゆく。

こうしたバレエは当時のヨーロッパの芸術潮流にちなんでロマンティック(ロマン主義)・バレエと呼ばれるが、1832年にパリ・オペラ座で初演され、その本格的な幕開きを告げたといえるのが、『ラ・シルフィード』である。*シルフィード、とはフランス語で*空気の精。主演のマリー・タリオニは、少し前から舞台上で登場し始めていた、薄ものの布を重ねたチュチュと呼ばれる衣裳やトウシューズを巧みに用いて妖精の浮遊感を表現し、その点でもこの作品は画期的だった(今ではバレエの象徴のように知られているこの二つは、じつはこの時代に考案された)。

スコットランドの青年ジェイムズは夢に現れたシルフィードが

忘れられず、婚約者も家も捨ててその後を追ってゆく。二人は森の中で幸せなひとときを過ごす、ジェイムズは魔女の悪だくみに嵌り、シルフィードに呪いのスカーフをかけてしまう。すると背中中の羽根が抜け落ちて彼女はみるみる衰弱し――。

今回踊られるのは、パリでの世界初演版に感銘を受けたデンマーク人のオーギュスト・ブルノンヴィル(1805~79)が1836年に自ら振り付けた版。まず特徴的なのは、花を摘む、小川の水を汲む、蝶を捕まえるといった、情景が眼に見えるように描写的なマイム(しぐさ)である。振付の面では、両脚を細かく打ちつけるステップや両腕を広げながらの前方への跳躍、左右両方向への回転など、精度の高い動きが目を見張る。妖精と人間の量感の対比の際立つソロから二人が並んでのユニゾンによるクライマックスに至るまで、ブルノンヴィル作品ならではの妙味を、詩情とともに味わえるパ・ド・ドウである。

長野由紀(舞踊評論家)

Choreographer



オーギュスト・ブルノンヴィル August Bournonville

デンマークの誇るロマンティック・バレエの振付家である。素早く高度なステップを積み掛けるアレグロの振付には独特の明るいダイナミズムがあり、本人の名を冠してブルノンヴィル・スタイルと呼ばれる。バレエ一家に生まれ、二度のパリ留学で研鑽を積んだ後25歳の若さでデンマーク・ロイヤル・バレエ団のバレエ・マスターに就任。半世紀近く同団を率いた。同時代の作家アンデルセンとも交流があり、民話や庶民の生活といった素朴な題材を温かく描いたバレエを次々と創作。『ラ・シルフィード』(1836)、『ナポリ』(1842)、『コンセルヴァトワール』(1949)等の代表作は途切れることなく踊り継がれ、20世紀後半には世界的にも知られるようになった。

Dancer



前田紗江 Sae Maeda

英国ロイヤル・バレエ団ファーストソリスト 横浜出身。7歳からバレエを始める。ローザンヌ国際バレエコンクールでスカラシップ賞を受賞し、英国ロイヤル・バレエスクールに留学。2017年英国ロイヤル・バレエ団に入団、18年にアーティスト、22年ファースト・アーティスト、23年にソリスト、24年にはファースト・ソリストに昇格した。バレエスクール在籍中からバレエ団の公演に参加。主なレパートリーとして、『ドン・キホーテ』や『シンデレラ』『ロメオとジュリエット』『くるみ割り人形』など数多くの作品に出演。アシュトンの『ラブソディ』では主役を務めた。



中尾太亮 Taisuke Nakao

英国ロイヤル・バレエ団ソリスト 松山に生まれ、愛媛バレエアカデミー、ドイツのアカデミー・オブ・ダンス・マンハイムにて学ぶ。ローザンヌ国際バレエコンクールでスカラシップ賞を受賞し、英国ロイヤル・バレエスクールに留学、2018年英国ロイヤル・バレエ団に入団し、19年にはアーティスト、22年にはファースト・アーティスト、そして23年にソリストに昇格した。これまで同バレエ団の数々の作品に出演。『白鳥の湖』でのベンノや、『真夏の夜の夢』のバックなど、重要な役を務め、『ラブソディ』では主役を踊った。

佐久間奈緒

Five Brahms Waltzes in the Manner of Isadora Duncan

Five Brahms Waltzes in the Manner of Isadora Duncan

振付=フレデリック・アシュトン
音楽=ブラームス
振付指導=ヘレン・クロフォード
上演協力=英国ロイヤル・バレエ団
ピアノ=佐藤美和
スタジオ協力=スタジオアーキタンツ

Program Note

20世紀のイギリスのバレエ隆盛の立役者の一人となった偉大な振付家であり、英国ロイヤル・バレエ団の芸術監督を務めたフレデリック・アシュトン(1904~88)によるソロである。*イザドラ・ダンカン風のブラームスの5つのワルツ、というタイトルにその名の含まれるイザドラ・ダンカン(1877~1927)はアメリカ出身のダンサー/振付家で、形式と天上的な軽さを重んじる古典バレエの美学に反発し、肉体の重みを感じさせる自然でシンプルな動きを主調としたモダンダンスの先駆者の一人である。ヨーロッパでも活躍し、新しい芸術の旗手として脚光を浴びるとともに、波乱万丈の人生そのものが注目を集め、後の時代の映画やバレエ作品の題材ともなっている。アシュトンは10代の頃にダンカンの踊りを観て、その流麗な腕使いや裸足の美しい足、*自分自身を置き去りにするかのような、走り方、そしてフットライトを超えて迫ってくる強いパーソナリティなど、すべてに衝撃を受けたという。

本作はまず1975年6月に、ダンカン自身も作品に用いたことがあるブラームスの「16のワルツ」(作品39)15番に振り付けられ、英国ロイヤル・バレエ団のプリンシパルだったリン・シーモアによってハンプルク歌劇場で初演された(今も続くハン

ブルク・バレエ団恒例のニジンスキー・ガラ、このときが第1回だった)。しばしば女優にも比せられたシーモアの豊かな表現力も相まって好評を博したが、とはいえ、約2分では作品として短すぎるというのがアシュトン自身の感触だった。手を加える機会が訪れたのは、翌1976年6月、場所は英国ロイヤル・バレエ団発祥の地であるサドラーズ・ウェルズ劇場、アシュトンが振付家としての第一歩を踏み出したバレエ・ランペールというカンパニーの創立50周年記念ガラでのこと。同じワルツ集から1番を前奏曲として冒頭に加え、2番、8番、10番、13番に新たに振り付け、現在観られるこの作品の姿となった。

古代ギリシア風のゆったりとした衣裳に裸足という踊り手の姿はダンカンその人を彷彿とさせ、時に力強く、かと思えば官能的と変化に富んだ踊りには、端正、瀟洒といった言葉で形容されることの多いアシュトンの作品群の中であって、異色の味わいがある。とりわけ作品の原型となった最後のパートでの、花びらを両手から散らしながらの踊りは甘美で切なく、えもいわれぬ余韻を残す。

長野由紀(舞踊評論家)

Choreographer



フレデリック・アシュトン Frederick Ashton

英国バレエの礎を築いたとされる振付家。軽やかなフットワークと上体の立体的な用い方から生まれる、上品で詩的な味わいが魅力である。外交官を父に南米エクアドルに生まれ、アンナ・バヴロワの公演を観てダンサーを志す。学業のためにロンドンに戻り社会人となってからバレエを習いはじめるといふ遅いスタートだったが、振付の才能を早くに見抜かれ、設立から間もない英国ロイヤル・バレエ団の前身に入団。特に英国最高のバレリーナと讃えられたマーゴ・フォンテインのために多くのバレエを創作した。1963~70年には同団の芸術監督を務める。代表作に『シンデレラ』(1948)、『リーズの結婚』(1960)、『マルグリットとアルマン』(1963)など。

Dancer



佐久間奈緒 Nao Sakuma

元英国バーミンガム・ロイヤル・バレエ団プリンシパル 福岡生まれ。三ノ上万由美バレエスタジオ、古森美智子バレエスタジオにて学ぶ。その後英国ロイヤル・バレエスクールに留学、卒業後1995年に英国バーミンガム・ロイヤル・バレエ団に入団した。2002年にプリンシパルに昇格し、18年の退団まで数々の作品で主役を務める。『白鳥の湖』や『眠りの森の美女』などの古典作品から、『リーズの結婚』『チェックメイト』『エリート・シンコペーションズ』『レ・ランデヴァー』など英国バレエを代表する作品など多彩なレパートリーを持つ。現在はダンサーとしての活動のほか指導者として育成の現場でも活躍している。

©Andrew Ross

中村祥子 & 厚地康雄

『椿姫』から3つのパ・ド・ドゥ "

*"La Dame aux camélias
3 pas de deux"*

振付=山本康介
音楽=リスト
ピアノ=佐藤美和
スタジオ協力=スタジオアーキタンツ

Program Note

フランスの文豪アレクサンドル・デュマ・フィスの小説『椿姫』(1848)は、出版直後から演劇として、あるいはヴェルディ作曲のオペラ『ラ・トラヴィアータ』として舞台化され人気を博した。華麗でちょっと不道徳な夜の社交界や、高級娼婦の享乐的なイメージとは裏腹な純愛を描いて涙を誘う物語が、視覚化され音楽化されてさらなる魅力を放つことから、もっともなことだ。

バレエにおいても、20世紀に入ると多くの振付家が手がけるようになる。なかでも広く知られているのは、フレデリック・アシュトンが当時の世界的なスターだったマーゴ・フォンテインとルドルフ・ヌレエフに振り付けた『マルグリットとアルマン』(1963)、ジョン・ノイマイヤーが演劇的バレリーナとして知られたマリシア・ハイデを主演に振り付けた版(1978)だろう。語り口や上演時間の長さはずいぶん違うが、あえてオペラ曲は用いず、アシュトンがリスト、ノイマイヤーがショパンと、デュマの原作と同じ19世紀のパリに生きた作曲家の音楽によって時代の空気を再現しようとした点が共通している。

今回上演される作品を手がけた山本康介も同じように考え、ショパンやベルリオーズと悩んだ末リストに決定したと言う。とはいえその選曲は、激しく畳みかけるようなオーケストレーションのアシュトン版とは一味も二味も違っている。舞台上で奏でられるピアノソロが、もっとやさしく恋人たちの心の柔らかな部分に寄り添い、それを引き立てるのである。

2021年、関西を拠点とするバレエカンパニー ウエストジャパンにより、同団の主宰者である瀬島五月の主演で約50分の物語バレエとして初演。今回はそこから主役の二人が出会い心惹かれあう場面、パリの喧騒を離れた田舎での幸福なひととき、そして病いで命尽きようとするマルグリットの元にアルマンが駆けつけての、最後の情熱を燃やすかのような時間の三つを上演する。使用曲は順に「ため息」、「なぐさめ」第3番、「愛の夢」第3番。また間奏曲として「夢のなかに」「巡礼の年第一年スイス」が演奏される。

長野由紀(舞踊評論家)

Choreographer



山本康介 Kosuke Yamamoto

愛媛県今治市生まれ。美佳バレエスクールにおいて山口美佳に師事。1998年英国ロイヤル・バレエスクール入学。首席で卒業しニネット・デ・ヴァロワ賞も受賞。2000年バーミンガム・ロイヤル・バレエ入団。数々の作品でプリンシパル、ソリストを務め、バレエ団の公演においても振付を手がける。帰国後は、演出家、指導者としても活動。テレビドラマの監修、「プレミアムカフェ」「ららクラシック」「ローザンヌ国際バレエコンクール」の解説者としても出演。日本国内のさまざまなバレエ団で振付や指導にあたる。著書『英国バレエの世界』(世界文化社)。英国ロイヤルバレエ団ゲスト教師。洗足学園大学客員教授。

Dancer



©Masatoshi Yamashiro

中村祥子 Shoko Nakamura

K-BALLET TOKYO 名誉プリンシパル
1996年ローザンヌ国際バレエコンクールでスカラシップ賞受賞、98年までジョン・クランコスクールにて学ぶ。2000年ウィーン国立歌劇場バレエ団に入団、06年ベルリン国立バレエ団に移籍。マラーホフ版『眠りの森の美女』やマクミラン版『マノン』、ロビンズ振付『牧神の午後』など古典から現代作品まで多くの作品で主役を務める。ハンガリー国立歌劇場バレエ団への移籍を経て15年に帰国、K バレエカンパニーに入団。熊川版『カルメン』や『クレオパトラ』など、20年までプリンシパルとして活躍し、現在はフリーとして多方面に活躍している。



厚地康雄 Yasuo Atsuji

元英国バーミンガム・ロイヤル・バレエ団プリンシパル
栃木県出身。2003年に英国ロイヤル・バレエスクールに留学、06年に英国バーミンガム・ロイヤル・バレエ団(BRB)に入団した。新国立劇場バレエ団への移籍を経て13年にはBRBに再入団、数々の作品で主役を務め、18年にはBRBでは日本人男性として初のプリンシパルに昇格した。ピーター・ライトやデヴィッド・ピントレーなど数々の振付家の作品で主役を務め、同バレエ団を代表するダンサーとして活躍。22年に日本に帰国してからも国内のバレエ公演やミュージカル公演にも出演、精力的に活動を行っている。

高田 茜 & 平野亮一

『ロメオとジュリエット』

からバルコニーのパ・ド・ドゥ

*"Romeo and Juliet
Balcony pas de deux"*

振付=ケネス・マクミラン
音楽=プロコフィエフ

Program Note

『ロメオとジュリエット』は、20世紀に生まれた物語バレエの最高傑作ともいえる作品である。対立する二つの名家に生まれた若い恋人たちの悲劇を描いたシェイクスピアの戯曲、それ自体がドラマティックな推進力に富むプロコフィエフの音楽に魅せられたあまたの振付家たちが、今に至るまで次々と独自のプロダクションを創作し続けている。

1965年に英国ロイヤル・バレエ団で初演されたケネス・マクミラン(1919~92)による演出は、そのうちもっとも人気の高いものの一つである。ミニスカートとビートルズに象徴されるストリート発の若者のエネルギーが横溢するロンドンという時代と場所を背景に誕生した、かつてなく情熱的で意思的なジュリエット像、そして全幕を貫く疾走感。さらにルネサンス初頭のイタリアはヴェローナの街を舞台上に甦らせる時代絵巻のような美術も、その魅力の一つに数えられるだろう。

だが、なんといってもこのバレエを特別なものにしてるのは、振付そのものの持つ感情表現の力である。

第一幕の終わりに踊られるバルコニーのパ・ド・ドゥは、その象徴とも呼ぶべき場面である。ロメオはある晩ジュリエットの屋敷で開かれた舞踏会に紛れ込み、二人は運命的な出会いを果たす。その夜更け、自室のバルコニーに出て愛しい人を思う彼女の元に、再び彼が忍んでくる――。

どこまでも駆け上がっていくようなハーブの音や軽やかに跳梁するメロディと同調した高いリフトが天にも昇る心地を表現し、ジュリエットが完全にロミオに体重を預けた状態でスリリングなポーズが、ますます強く惹かれあう二人の情熱を示す。

二人の幸福が頂点に達するこの時間を境に、物語は少しずつ悲劇に向かって進み始める。多くの登場人物の血が流され、恋人たちの死で終わる物語の中において、東の間であるからこそ美しく、観るものにも現実を忘れさせる。稀代のパ・ド・ドゥの名手であったマクミランの、まさに名振付である。

長野由紀(舞踊評論家)

Choreographer



©ArenaPal. Roy Round. 1990

ケネス・マクミラン Kenneth MacMillan

劇的な作風で知られる英国の振付家。その最大の魅力は、女性ダンサーの柔軟性を極限まで活かし複雑なリフトを駆使したパ・ド・ドゥにある。登場人物の感情を時に濃厚に、時に繊細に描き出す振付は観るものの心を揺さぶり、造形的にも鮮やかな美しさを印象付ける。人間心理や社会の闇を掘り下げる手腕に比類がなく、音楽の本質を掬いあげるセンスにも優れる。スコットランド生まれ。英国ロイヤル・バレエ団の前身に入団後はダンサーとして早くから将来を囑望されるも、舞台恐怖症に悩まされ振付家に転身。1970~77年同団芸術監督。代表作に『大地の歌』(1959)、『ロミオとジュリエット』(1965)、『マノン』(1974)、『マイヤリング』(1978)、など。

Dancer



©Andre Uspenski

高田 茜 Akane Takada

英国ロイヤル・バレエ団プリンシパル
東京都出身。2006年にポリショイ・バレエ・アカデミーに留学。08年2月、ローザンヌ国際バレエコンクールでプロ研修賞と観客賞を受賞。同年9月から英国ロイヤル・バレエ団に研修生として入団する。翌09年にはアーティストとして正式入団し、10年にはファースト・アーティスト、11年にソリスト、14年にファースト・ソリストに昇格。16年6月、最高位のプリンシパルに任命された。古典バレエの名作から、フレデリック・アシュトンやケネス・マクミランなど英国を代表する振付家による数々の作品に主演、同バレエ団を代表するプリンシパルとして活躍している。



©Johan Persson

平野亮一 Ryoichi Hirano

英国ロイヤル・バレエ団プリンシパル
尼崎出身。4歳からバレエを始める。2001年のローザンヌ国際バレエコンクールでプロ研修賞を受賞、英国ロイヤル・バレエ団に入団する。翌02年にはアーティストに昇格。その後07年にはファースト・アーティスト、08年にソリスト、12年にファースト・ソリストに昇格し、16年にはプリンシパルへの昇格を果たした。これまで数々の作品で同バレエ団の主役を務める。『ジゼル』『白鳥の湖』や『眠りの森の美女』などの古典作品から『ロメオとジュリエット』『マノン』『マイヤリング』など英国の演劇バレエの代表作まで幅広い作品をレパートリーに持つ。

スターダンサーズ・バレエ団 コンサート

The Concert (or, The Perils of Everybody)
Choreography – Jerome Robbins

The Concert

振付=ジェローム・ロビンズ
音楽=ショパン Polonaise "Militaire"; Berceuse, op. 57; Prelude, op. 28, no. 18;
Prelude, op. 28, no. 16; Waltz in E Minor; Prelude, op. 28, no. 7;
Prelude, op. 28, no. 4; Mazurka in G Major; Ballade, op. 47, no. 3
演出・振付指導=ベン・ヒューズ
舞台美術デザイン=ソール・スタインバーク
© 2024 The Saul Steinberg Foundation / ARS, New York / JASPAR, Japan G3715
衣裳デザイン=アイリーン・シャラフ
照明デザイン=ジェニファー・ティプトン
照明再構成=足立恒

振付家ジェローム・ロビンズは、このように記している。*コンサート鑑賞の楽しみの一つは、音楽を聴くことに没頭できることである。このとき、無意識のうちにイメージが浮かんでくるがよくあるが、そうした白昼夢は、音楽そのものやプログラムノート、あるいは聴き手の個人的な夢や問題、妄想などに影響を受け、パターンや道筋が変化していく。特にショパンの音楽は、「蝶のエチュード」、「1分間のワルツ」、「雨粒の前奏曲」など、空想的な「プログラム」名に影響を受けやすい。

Performed by permission of The Robbins Rights Trust through special arrangement with Music Theatre International (MTI) www.mtishows.com

Program Note

「コンサート」は、20世紀の天才振付家ジェローム・ロビンズ(1918~98)が1956年、ニューヨーク・シティ・バレエのために振り付けたコメディ・バレエの最高傑作。

ロビンズはショパンの音楽をこよなく愛し、いくつもの作品を創作しているが、この「コンサート」ではあえて「ショパンを聴く」という行為に焦点を当て、ピアノ・コンサートに集まった聴衆の様子をコミカルかつ風刺的に描いた。

「軍隊ポロネーズ」で幕は開き、静かに「子守歌」が流れる中、9人の個性溢れる聴衆たちが集まって来る。演奏に浸る熱心な音楽愛好家、雑音を立てて眠られる女性たち、この作品の主役でもある「マッド・バレリーナ」は見かけも心も美しいが空気の読めない不思議な女性、さらに、威圧的な妻に付き添ってやってきた夫などなど……。そこで繰り広げられるのは、思わず吹き出してしまうような、客席にあるあるのエピソードばかり。

やがて作品は、その聴衆たちがショパンの曲想からイメージするユーモラスな空想世界へと迷い込んでゆく。バレリーナは、

「プレリュード第7番」でステキな帽子を被って自己陶醉に浸り、そのバレリーナに一目ぼれをする夫は、「マズルカ第53番」の中で勇壮な騎兵となり、「バラード第3番」では蝶々となってバレリーナと戯れる。全体として明確な筋はないものの、作品に散りばめられたエピソードと笑いの数々は、ロビンズによって緻密に計算し尽くされた、まさに天才のなせる業。中でも「ワルツ第14番」に乗せて踊られる6人の女性によるバレエ・シーン、絶妙に揃わない「ミスティク・ワルツ」として、この作品の名場面になっている。

これまで、アメリカ国内のバレエ団のみならず、英国ロイヤル・バレエ、パリ・オペラ座バレエなどでも上演されてきた本作品は、真の演技力と技術力が試される作品でもある。日本のバレエ団としては2022年9月にスターダンサーズ・バレエ団が初めて上演し大絶賛を浴びた。これまで数々の現代バレエに意欲的に取り組んできたスターダンサーズ・バレエ団だからこそ演じられる「コンサート」。多くの観客にとって忘れられない舞台となることだろう。

川島京子(跡見学園女子大学教授)

Choreographer

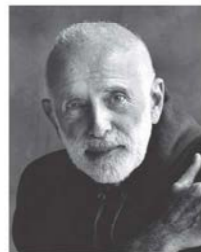


Photo by Jesse Gerstein, Courtesy of the Jerome Robbins Foundation.

ジェローム・ロビンズ Jerome Robbins

20世紀を代表するアメリカの振付家。1940年バレエ・シアター(のちのABT)にダンサーとして加わり、44年に「ファンシー・フリー」で振付家デビュー。49年からは、ニューヨーク・シティ・バレエ(NYCB)に移籍し、「不安の時代」(1950)、「権」(1951)、「牧神の午後」(1953)をはじめとする60以上のバレエ作品を振り付けた。バレエのみならず、「王様と私」(1951)、「ウエスト・サイド・ストーリー」(1957)、「屋根の上のバイオリン弾き」(1964)など、数々の名作ミュージカルを世に送り出し、かつ演劇、映画の分野においても世界的な名声を得た。

Ballet Company

スターダンサーズ・バレエ団 Star Dancers Ballet

1965年創設。1981年に日本のバレエ団として初の財団法人化を果たした。創立当初からナショナルバレエの創造を活動の柱とし、日本人振付家による数々のオリジナル作品を生み出す一方、海外の優れた振付家の作品紹介にも力を注ぎ、古典から現代作品まで日本初演作品を含む世界水準のレパートリーを保持している。国内公演のほかドイツ、中国、韓国などでの海外公演の実績も多く、2019年にはバリのJapan Expoにおいてバレエ「ドラゴンクエスト」を上演し好評を博した。また、学校巡回公演やワークショップを通して子どもたちがバレエに触れる機会を幅広く提供しているほか、障がいのある方が気軽に鑑賞できるリラクスパフォーマンスやパーキンソン病患者のためのダンスプログラムに取り組むなど、社会と広くかかわる活動も積極的に行っている。2025年に創立60周年を迎える。



©HASEGAWA Photo Pro.

Dancer



渡辺恭子 Kyoko Watanabe

東京都出身。胡桃バレエスタジオを経て、1999年バリのスタンローワバレエ学校入学。2003年バリ高等音楽院に編入し、05年首席で卒業、チューリッヒ・オペラ座バレエ団に入団。翌年ライブツィヒ・オペラ座バレエ団に移籍。第21回ヴァルナ国際バレエコンクール奨励賞及びファイナリスト。08年スターダンサーズ・バレエ団に入団、文化庁新進芸術家海外留学制度により13年から2年間カールスルーエ・バレエにて研鑽を積む。ライト版「コッペリア」、チューダー「リラの園」、鈴木稔「シンデレラ」の主役等、多くの作品でプリンシパルロールを務めている。2023年舞踊批評家協会新人賞受賞。



林田翔平 Shohei Hayashida

福岡県出身。3歳より真弓弓子、大野真紀に師事。ザ・バレコン福岡シニアの部第2位及び福岡県知事賞など受賞。2009年新国立劇場バレエ研究所入所、11年新国立劇場バレエ団に入団、15年ファーストアーティストへ昇格。同団在籍中のレパートリーには、「白雪姫」王子、ピントレー振付「アラジン」エメラルド、フランシ振付「シンフォニー・イン・スリー・ムーヴメント」プリンシパル等。17年スターダンサーズ・バレエ団入団。ライト版「ジゼル」、鈴木稔演出・振付「くるみ割り人形」、バレエ「ドラゴンクエスト」等多くの作品で主役を務めている。



中川 郁 Iku Nakagawa

東京都出身。ミヤキバレエ学園を経て、2003年橋バレエ学校入学。07年ハンガリー国立バレエ学校へ留学し、ルドルフ・ヌレフ国際コンクール第3位受賞。09年新国立劇場バレエ研究所に入所。11年同研究所修了後、牧阿佐美バレエ団に入団し、15年アシュトン「リーズの結婚〜ラ・フィュー・マル・ガルデ」リーズ役で主役デビュー。以降「くるみ割り人形」「眠れる森の美女」「飛鳥 ASUKA」に主演。23年スターダンサーズ・バレエ団に入団。鈴木稔演出・振付「シンデレラ」等でソリストとして活躍、「くるみ割り人形」(全1幕版)では主役を踊っている。

秋山和沙 石川龍之介 石山沙央理 岩本悠里 小澤倅造 加地暢文
勝木萌香 久野直哉 早乙女愛穂 佐野朋太郎 塩谷綾菜 関口啓
飛永嘉寿 富岡玲美 仲田直樹 前田望友紀 宮司知英 渡辺大地

ピアノ=本田聖嗣